

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 MUKHERJEE Hiya

論 文 題 目

現代都市部における産育をめぐる習俗と信仰の研究—愛知県
名古屋市の事例を中心に—

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 佐々木 重洋

委員 名古屋大学教授 近本 謙介

委員 名古屋大学准教授 東 賢太朗

委員 名古屋大学准教授 吉田 早悠里

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、現代医療の普及とともに病院出産が当たり前となっている現代日本の都市部における産育習俗と関連する儀礼の現状を明らかにするとともに、とくに出産する当事者である女性、産育儀礼に関係する神社仏閣の関係者が出産と産育をめぐる習俗と信仰の現状と変化をどのようにとらえているのか検討したものである。本論文は、全体で10章からなっている。

序章では、本論文における主要な論点として安産祈願の実践内容、とくに腹帯祝いの習慣、安産祈願と神社仏閣の関係、里帰り出産の慣行、出産をめぐる禁忌、出産と「穢れ」観、出産と産育に関する知識の入手先があげられ、それぞれ先行研究の成果と課題が批判的に検討され、本論文における問題の所在と目的が提示される。

第1章では、愛知県名古屋市の概要、現在の名古屋で安産祈願先として認知されている神社仏閣の事例として塩竈神社、伊奴神社、熱田神宮、興正寺、出産を経験した母親を対象とした調査を実施した名古屋市地域子育て支援拠点についての概要、調査期間、今回の調査で用いた方法論などが述べられる。

第2章では、塩竈神社、伊奴神社、熱田神宮、興正寺において、現在安産祈願を担当している神社仏閣の関係者を対象とした聞き取り調査の結果が示され、神社仏閣の関係者が総じて現在の安産祈願に関して参拝者の信仰心の低下と儀礼の形骸化を懸念している現状が示される。続く第3章では、塩竈神社と興正寺において安産祈願の実態を観察するとともに、戌の日に安産祈願に訪れた妊婦116名を対象とした質問票調査の結果が示され、前章での神社仏閣関係者の憂慮とは裏腹に、回答した約8割以上の妊婦が安産祈願の重要性と意義を肯定的にとらえている現状が明らかにされる。腹帯慣行や禁忌などもほぼすべての回答者が実践している反面、出産を「穢れ」とみる意識はほぼみられなくなっていることが報告される。

第4章では、名古屋市地域子育て支援拠点において出産経験者である女性747名を対象とした質問票調査の結果が示され、続く第5章では、質問票回答者の中でインフォーマル・インタビューに応じた61名に対する聞き取り調査の結果が提示される。これらの資料から、回答に応じた妊婦のほとんどが安産祈願を実践しており、とくに戌の日の神社仏閣への参拝、腹帯祝いの慣行、禁忌事項の励行については根強く支持されていることが指摘される。第6章では、母親たちの出産前後の産育儀礼と習慣に関する民俗的知識、第7章では母親からみた妊娠と出産の体験、出産前後の禁忌事項に関する民俗的知識の現状とそれらの入手先の動向が記述される。

第8章では、序章であげられた論点に沿った考察がおこなわれる。終章では、これまでの議論が総括され、宗教的意識の低下や「穢れ」観の消失と同時に、人生儀礼としての安産祈願および関連する民間信仰は行動実践としてみた場合、変わらず重要視されているという指摘とともに、結論と今後の課題が提示されて論が閉じられる。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

出産と産育に関わる習俗と儀礼の研究は、人生儀礼研究の一環として日本民俗学、文化人類学の分野で相応の蓄積がある。2000年以降は、出産に対する研究関心が高まり、現代医療を視野に入れた研究が登場する一方、過去の産育文化に対する報告も蓄積されている。本論文は、近年のこうした研究動向をふまえつつ、とくに出産する当事者である女性と、産育儀礼に関係する神社仏閣の関係者が、出産と産育の現状と変化をどのようにとらえているのか、その実践と意識を論じたものである。

本論文はまず、現代医療のサービスが整備され、病院出産が日常的となっている日本の都市部における産育習俗と関連する信仰の現状に関する最新の一次資料を提供している点で、高い資料的価値を有する。とくに、名古屋市が運営する地域子育て支援拠点を対象とした現地調査は、産育儀礼研究としては他に類をみない独創的な試みであり、しかも747名に対する質問票調査と61名に対する聞き取り調査の併用により、これまでの先行研究をしのぐ数量的規模で豊かな資料を提示し得ている。

本論文ではこれに加えて、塩竈神社、伊奴神社、熱田神宮、興正寺において現在安産祈願を担当している神社仏閣の関係者を対象とした聞き取り調査、塩竈神社と興正寺における安産祈願の実態の直接観察、戌の日に安産祈願に訪れた妊婦116名に対する質問票調査も実施しており、これらの資料はこれまで基礎的な資料を欠いていた名古屋市、ひいては愛知県と東海地方の事例研究としても貴重な貢献を果たしている。

また、とくに民間信仰と習俗を扱う従来の研究が、それらの知識が豊富とされる古老や宗教的職能者、神社仏閣関係者を対象とした調査に偏りがちであったのに対して、本論文は、妊娠と出産を経験した当事者である若年層の女性を幅広く対象とした意識調査という点で独自の貢献を果たしていることも評価できる。そして、一見すると信仰や迷信の類を信じていないかのように語り、日頃は現代医療の知識に依拠して行動し、出産をめぐる「穢れ」観とも無縁にみえる現代の母親たちが、安産祈願と産育儀礼を実践し、禁忌を意識している現状を示した点は、宗教と信仰の実践のあり方を考えるうえでも示唆的であり、今後の理論的発展性も期待できる成果として評価できる。

ただし、本論文には課題も残されている。考察にはなお深化の余地を残しており、人生儀礼研究における本論文の位置づけは必ずしも十分とはいえない。今回の調査結果を他地域の事例と比較して、産育儀礼における地域特性の検討も望まれる。語りの内容と行動実践の間にみられる乖離については信仰と実践、イデオロギーとプラクティスなど、これまでもさまざまな文脈で議論されており、単なる信仰の衰退・形骸化論とは異なる議論も展開し得た。ただし、これらは今後の研鑽によってその克服が十分に期待できるものであり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員一同は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。